

まえがき

なぜ、我々は寺院に立つと、えもいわれぬ気分になるのでしょうか。そして仏堂の中に入ると、なぜおごそかな気分に含まれるのでしょうか。その秘密は、実は建築そのものにあります。寺院建築には隠された「デザインコード」や「仕掛け」が多く存在するのです。

奈良時代の都、平城京では天皇を中心とした社会体制が構築されるとともに、中国大陸式の宮殿が建てられ、多くの寺院が造られました。華やかな寺院建築は都城を彩り、権力者の権威を内外に示すサインであったのです。そのため、その権威や格式を示すデザインコードや仕掛けが寺院建築には込められています。屋根・葺き材ふきざい・天井・柱の形・組物くみもの……。それぞれの持つ意味を知ることが日本の寺院建築を深く読み解くカギとなります。

偉そうに述べましたが、私自身、初めて奈良を訪れたときには、そんなことはつゆ知らず、ただただ、古建築の力強さや造形美に感じ入るだけでした。古建築の魅力に惹かれて

建築史を専攻しましたが、東京には奈良時代の建物は一棟もありません。モノを扱う建築史にとっては現場百遍が大原則。

そこで、私は大学の研究室を飛び出し、奈良の研究所に職を得て、古建築や発掘の調査に携わり、じっくりと奈良の寺々と向き合う月日を約一〇年、重ねてきました。自宅から徒歩二〇分圏内に、多くの奈良時代の国宝の建物がある毎日です。

ちょうど私が奈良にいた二〇〇九年に東京国立博物館で興福寺こうふくじの阿修羅展あしゅらが開かれたことを皮切りに、奈良の寺々にスポットが当てられ、仏像の魅力がささやかれるようになってきました。その一方で、どうも古建築の見方は知られていないらしいということが分かってきました。

ただ、古建築に興味を持ってもらえていないわけではないらしく、聞こえてきたのは、

「専門用語が難しい」

「どこを見たらよいのか分からない」

「どれも同じに見える」

といった声です。

たしかに、建築史は歴史を名乗っていないながら工学部建築学科に属しており、文献史学・美術史・考古学などの分野と比べると、異色に見えるかもしれません。建築学科では歴史以外にも、設計・構造・環境など、建築を造るための教育を行っています。一方で美術史や考古学では、一般的に仏像や土器を造る教育を行っていないでしょう。

それゆえに建築史では単に古い建築を眺めるだけではなく、「建てる」ということを考えています。さらにいえば、この「建てる」という視点こそが、古建築を見るうえでポイントとなります。建築構造に対する葛藤と技術革新、パトロンや技術者の設計理念、木材の供給に関する問題……。さまざまな要素が古建築には詰まっており、建てるための工夫を知ることその魅力は倍増します。

ただ、考古学の専門家は自治体や大学など各地で活躍しているのに対して、建築史の専門家は少なく、古建築を解説できる専門家となると、その数はさらに限られています。古建築の見方を伝えるには、学校で得た知識だけでは、頭でっかちな分析で十分ではありません。そして文化人による雰囲気や印象の語りだけでは単なる感想にすぎないし、知識のない個人の感性に委ねた印象では、他者が共感できないこともあります。古建築の魅力に

迫るには、感性と知識、その両方が必要なのです。

そこで、本書では、まがりなりにも両者を知る私が古建築の案内人となり、その魅力と見方をガイドしたいと思います。私自身、学生を連れて古建築を見に行くだけでなく、奈良・京都で、一般の方とともに古建築をめぐるツアーの案内人をしてきました。その経験を活かして、読者のみなさんとも古建築を旅してみたいと思います。

そう言われても、では具体的にどうしたらよいか戸惑われるかもしれません。結論からいうと、まず、

「古建築は学ぶより、現地で実見して感じ取るべし」
です。

そんな感性の話をされても困るといふ方も多いでしょうが、建築に限らず、モノを見るときの第一印象は出会いのメッセージです。もちろん人それぞれ、古建築から感じ取る印象は異なるでしょうが、それには何か理由があります。例えば力強さ、圧倒される威圧感、ほのぼのとした雰囲気、天にも上るような高揚感。これらの印象の根源をたどると、太い柱、華やかな彫刻、鮮やかな彩色、高い天井などの建築の細部にいきつきます。建築の部

分部分が、知らず知らずのうちに我々、見る側に強いメッセージを投げかけているのです。実際に残っている古建築を徹底的に見てみると、細かいデザインや技法の違いが分かっ
てきます。これも、いろいろな選択肢がある中で、あえてその手法を使った理由を比較的、
合理的に説明できることは多いのです。それゆえ建物をよく見ることは、古建築との対話
の第一歩と言えます。

ひとくちに古建築といっても、時代や地域によってその魅力は異なり、一概に語るこ
とはできません。力強い法隆寺金堂こんどうと華やかな日光東照宮陽明門では、まるで別世界の建物
のように見えますが、ひも解いていくと、同じ木造建築文化の上にあります。その中でも
奈良の寺々の建築は日本の古建築の基本です。それゆえ、本書の古建築の見方を知ること
で、多くの寺院建築を理解することができるでしょう。

そして古建築を見る人間の目はカメラやディスプレイよりはるかに高精細に対象を認識
しています。そのため注意して見ると、細部はもちろん、微妙な凹凸までしっかりと違い
を読み取れます。例えば軒の反り具合に大工さんは命をかけるほど注力しますが、そんな
ミリの精度の積み上げを我々の目は認識していて、美しいと感じるのです。感覚や勘も、

結局、そうした人間が認識したわずかな違いの積み重ねによるもので、数値化できない情報の蓄積の結果なのです。例えば写真からでは、修理で取り替えた新材と建設当初のオリジナル部材の判断は難しいですが、現地に行けば実物を高精細な目で見る事ができますので、明らかにその違いを知ることができます。

もちろん、CGを用いたARやVRなどの新技術が増えてきていますが、材質や重量感など、現地でしか味わえない魅力が古建築には詰まっています。これはリアルでしか感じられないでしょう。

そこで本書では、東京から一泊二日の旅行ガイド、解説書、そして入門書を目指します。東京駅八時発の新幹線に乗って、京都で近鉄線に乗り換えれば、お昼前には薬師寺・唐招提寺とうしょうだいいじの最寄り駅、西ノ京に降り立っていることでしょう。思っているほど、奈良ははるかかなたの都ではないのです。平城京の西に残るこれらの名刹めいさつを廻り、古建築の基礎を学びつつ、天平てんぴやうの風に包まれてみましょう。

そして翌日の訪問先は興福寺・東大寺といった南都の中心地。ともに焼き討ちを受けて、鎌倉時代や江戸時代に再建されたものも多いのですが、古代建築も残っています。むしろ

多様な時代の建物があるからこそ、これらを通して見ることで、時代ごとの「好み」の違いも浮き上がってくるのです。古建築の前で私が何を感じ、そしてその感覚がどこから来ているのか、ここに力を入れてご案内しましょう。

一泊二日の駆け足の南都寺院巡りですが、この四つの寺々には古建築やその痕跡を見る要素が凝縮されています。ここで得られる寺院建築鑑賞の知識は奈良の寺に限らず、他の地域でも役に立つこと、まごうかたなし、です。

ぜひ本書を手に現地を訪れ、古建築を肌で感じてもらいたいと思います。